

## 「遺影」に思う

岐阜高山教務所書記 井野了慧

私の趣味の一つにカメラがあります。最近は優秀なカメラの付いたスマホが普及して、誰でも気軽に写真を撮れるようになったので、頼まれることもなくなりましたが、以前は自坊のご門徒さんから「若さんよ、俺ところは皆「写ルンです」しか使えねえもんでよ、ひとつ上等の写真機で俺の遺影を撮ってくれんか」とか、「バアさんの葬式の際の遺影は表情が硬くてねえ、どうもバアさんらしくねえや。お寺で撮った写真にいい顔したのがねえけ？」なんて頼まれることがありました。今でいう終活でしょうか、どうせ残すのなら納得のいく<sup>おもかげ</sup>面影を残しておきたいと思うのは自然なところでしょう。

お参りに行くと、仏間に先祖代々の遺影がずらりと掛け並べてあるのはよく見る光景です。それはいいのですが、お盆の際など、ご本尊そっちのけにしつらえた盆棚で、遺影をド真ん中に据えて<sup>こうげ</sup>香華や供物が供えてある、なんていうのもよく見ます。こうなると、果たして一体何を拝んでいるのかわからなくなってしまいます。

遺影は、そこに残る面影を通して、亡くなった方を<sup>しの</sup>偲ぶよすがとなります。その偲ぶ心、<sup>とむら</sup>弔う心で写真に手を合わせるのでしょう。しかし、親鸞聖人が「親鸞は<sup>ぶも</sup>父母の<sup>きょうよう</sup>孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず」

とおっしゃっているように、真宗の教えは先祖供養ではありませんし、写真を拝む宗教でもありません。

亡くなった方の面影と生き方をおして、その方を仏とらせていった阿彌陀さまのはたらきに手を合わせてお念仏を申し、自分自身もまた仏となっていく確かな歩みをいただくのが、真宗門徒にとっての遺影の意味であり、本当に亡くなった方を偲ぶということではないでしょうか。遺影も、さらにはお寺の親鸞聖人、蓮如上人、七高僧しちこうそうの御影ごえいも、教えを聞くご縁としてあるのです。

金子大榮かねこ だいえいという先生せんせいの書かれた『意識歎異抄いしにしょう』という本に、このような言葉があります。

「思い出おもいでに還かえり来る祖先はみな仏となりて我らを安あん慰にせらるる。

さればわれらもまた仏となりて後のちの世のところに現れよう」

遺影を前に、自分が何に手を合わせているのか、仏となる道を歩んでいるのか、もう一度考えるお盆にしませんか。